三才児の競争あそびについて

関　治子

三才児の競争意識

三才児の競争あそびにふれる前に、三才児そのものの競争意識について考えてみたい。三才児は未分化で、自己中心性が強い状態であり、遊びも一人遊びが多く、なかなか友だちと遊ぶということがむつかしい。段段と友だち同志の交渉が生れてくるのだが、これが又、極めて原始的な方法であることが多い。自分が今ほしいと思う玩具は、強引にとって来てしまったり、ほしいものはほしいで済ましてしまう。「かごめ」を先生と一しょにしていて、いざ名ざしされて中に入る番になるとやめて外に出てしまう。無邪気といえば無邪気、自己本位といえば自己本位な行動が沢山ある。かけっこなども、「よーい、どーん」と自分で合図してかけ出し、自分がゴールキーパーであるから、いつでも一番で「バンザーイ」と喜んでいる。

このように何でも自分が一番上手なのであり、一番強いのだという気持を考えてみると、自己本位ではありながら、競争意識というものは充分に存在はしていると思う。ただし、三才児の競争意識は、集団を意識しない競争意識ではないだろうか。

三才児の競争あそびの意義

三才児では、身体を充分に動かして運動するということが余り行われていない。日頃の状態をみていても動きの範囲は小さいし、まだ歩き方が、よちよち歩きに近かったり、手を真直に上にあげるにしても、ぴんと張って手をあげることも、なかなか出来ない。このように未発達な身体発育の段階から、均等な発育を促していくために、身体全体を使っての運動をさせることは、大切なことだと思う。

精一ぱいに運動するには、気分的に熱中し、気持の盛り上りが大切であって、そういう意味で、競争心をかりたてるならば、思う存分な動作もみられるに違いない。

しかし、三才児の場合、五才児に於る目的と同じ目的をもっては危険である。それにはまず、友だちという集団社会の人的構成が全然違うことを考慮しなくてはならない。まだ一人遊びが多いし、友だちの交渉も一人或は二人位の少人数から生じて行く。従って、紅白にわかれての勝敗を決するものや、組織だった競争あそびは、発達段階からみても無理であって、ことさらに、そこまで持って行く必要はない。

友だち関係や運動の状態がこんなであるだけに、多勢で一つの運動やあそびをすることも大切な指導の要素となってくる。

多勢で楽しむという点と共に、運動を自発的に好んでいない幼児にも、経験させるということが必要である。

以上のような観点から、競争あそびの要点を考えて、幼児に必要な材料として、とり上げて行きたいと思うし、又、実際にも、いろいろな形で、日常の遊びに入っていて、みられていることである。が、競争あそびには、運動の醍醐味・対抗意識・技術の巧緻性・集団の和・努力と熱意・フェアーな態度の習得など、楽しいことから苦しいことに至るまでの数多くの本来の目的がある。しかし、充分な運動をさせて、身体諸機能の発育を促すことと、友だち遊びの発達のための一助になる

こと、こんな所に三才児としての競争あそびの主眼をおきたいと思っている。

三才児の競争あそびの指導の留意点

○人的構成と先生の参加　幼児間から自発的に生れた競争あそびもあるのだが、個人的な競い合いが多いので、三才児に於ては特にその機会を捉えて先生が加わり、競争あそびへと持って行く。又、時には、先生の方から積極的に誘いかけなくては、その機会は見つからないかも知れない。何れも、少人数を対象にして、機会を捉えての指導が常に必要である。

○年長児との接触　年長児の遊びを三才児はよくみている。案外長いことみてきて、こまかいことまで覚えてきては、後で真似してやり出したりして、とても刺戟を受けるものらしい。時には一しょに入れて貰って経験する幼児もいる。この場合、勿論、高度なことは無理であるから、年長組の幼児がかばいながらするように仕向けねばならないし、時間的にも、疲れたり、あきたり、むつかしがったりしないよう短いことが望ましい。

○高度な技術や、複雑なきまりの伴わないものであること　競争あそびで、とかく基になるジャンケンをみても、ジャンケンの型と種類や勝敗などの条件一切を三才児の殆どが知らない位であるから、高度な技術を要するものや、きまりのむずかしいものなど、いろいろな条件を出来るだけ排除しなくてはならない。同じあそびをするのにも、五才児などとは自ら違ったルールや約束を創造してあげてよいと思う。

○音楽リズムとからめての行き方　集団を対象にしての競争あそびは、まだ無理な段階である。自然に行われている競争あそびは、たった一人、二人の友だちとの間でなされるだけで、五・六人まして十何人での紅白対抗のあそびは到底出来ない。これは運動の技術そのものが充分でないことと、社会性の発達も未分化で、友だち遊びが出来ない状態が多いからであるが、競争あそびの目的を考えてみれば、やはり、全然競争心も意慾もなく、運動量も少いような幼児にこそ、指導も必要なわけで、音楽リズムの指導の折に、先生は少しずつその意図を織りこんで行く方法は案外自然で効果的である。その場合、紅白に分れるものでなく、全体で出来るもので、勝敗や順位などは、正確に判定する必要はない。

手足を存分に伸したりまげたりするのに、背くらべということにして、背のびをして、手も充分上に伸し、誰が一番か、くらべっこをする。この時、適当な音楽効果は、幼児の意慾を湧きたたせてくれる。又、小さく体をまげてしやがみ込み、誰が一番小さくなったか、くらべっこをする。というように、「くらべっこ」の程度に持って行ってよいのではないだろうか。

兎とびの両足跳で、スタートからゴールまで横一列に並んで兎の競争をしてもよい。その他、運動させるのに適当な動物になっての競争も考えられる。音楽やリズムを示して行くと、雰囲気を盛りたてられるし、音楽が加ると、尚一層楽しくなる。又、与えられた音楽リズムで、身体の動きを敏捷にそく応させて行き、リズム感の把握とも並行して指導して行くことが出来る。

これらの指導は、何れも、気分的な要素に支配されて面白くもなり、つまらなくもなるので、指導上、先生は雰囲気をつくることに気を配りたいと思う。時に、故意に競争心をかりたたせたり、時にはごっこ遊びやその他の遊びの中から自然に競争あそびに方向づけたりして、機に応じ、折にふれては方法を講じてあそびを固定させず、豊かにして行きたいと思う。

（お茶の水幼稚園）

×　×　×